

**2021年度**  
**一般入試〈前期〉**  
**2021年2月1日実施分**

# **問題と解答**

**国語**

## 国語

I 次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えなさい。

科学には常に進歩、発展というイメージがつきまとう。誤りを内包した旧説が、それを正した新説に取って代わられるという基本的な枠組みの交替をづけながら、科学はその歴史を刻んできた。と記述されがちである。

「コペルニクスの転回」と表現される天動説から地動説への切り替えは、そうした科学の側面を象徴的に表す出来事であろう。そして、地動説という新しい宇宙観を基盤にして一七世紀後半、近代科学の最初の理論体系となるニュートン力学が確立されるわけである。それは思弁的な論理のつなぎ合わせの域を出なかったアリストテレスの運動論を根底からひっくり返す、数理化された演繹能力の高い知の道具であった。

また、古代、中世から連綿と試みられてきた錬金術が一八世紀末、定量的で精密な実験によって否定され、新しい物質観にいきよした近代化学が誕生することになる。このとき、現代につながる元素の概念がこうチクされるに至ったわけである。

錬金術と並んで人間が長い間、その実現に向け夢を追いつづけてきたものに永久機関がある。永久に作動し、仕事をしてくれる、濡れ手に粟の機械である。しかし、一九世紀半ばに完成された熱力学によってこれもまた、葬り去られる運命をたどることになる。

熱力学がその存在を否定したもうひとつに、カロリック（熱素）と呼ばれた不可秤量物質（重さのない仮想粒子）がある。一九世紀に入るまで、熱はこのカロリックの流れによるとみなされ、現象論的にはそれでうまく説明がつけられていた。ところが、エネルギーという新しい物理量の導入により、熱は物質を構成する粒子の運動に帰着されることとなる。その結果、不可秤

量物質は科学の表舞台から姿を消したのである。

さて、<sup>⑧</sup>一九世紀半ばには生物学の分野でも大きな変革が訪れた。一八五九年、ダーウインが『種の起源』を著し、自然選択説にもとづく進化論を世に問うたのである。それは世界周航を通して行われた多種多様な生物の観察と膨大な数に及ぶ標本の収集から導き出された学説であり、神を生物の創造主とするキリスト教の自然観に対し客観的証拠（観察記録や標本）を提示して、その反証を試みるものであった。

同じころ（一八六〇年）、パスツールが当時、定説とみなされていた生命の自然発生説を否定する実験を報告している。生物にはいずれも親がいる。<sup>⑨</sup>微生物（バクテリアやカビなど）は腐敗した物質（非生命体）から生まれてくると、一九世紀には考えられていた。パスツールは肉汁を特殊な形をした首のついたフラスコに詰めて<sup>⑩</sup>シヤふつし、外からほこりなどが入り込まないよう工夫すると、肉汁は腐らない、つまり微生物は発生しないことを証明した。そして、フラスコの首を取りはずすと、腐敗はすぐに進行した。肉汁を腐らす微生物は物質から自然に発生するのではなく、彼らにもちゃんと親がいたのである。

自然界に存在する実体を大別する方法として、生命と物質という分類の仕方があるが、ある時代まで自然発生説という捉え方で両者には接点が設けられていた。これに対し、パスツールは両者のリンクを切断したわけである。この実験は生命観に大きな転換をもたらすものとなった。

以上、旧説から新説へと移行する科学史上の事例をいくつかあげてきたが、なかでも二〇世紀のはじめ、アインシュタインによる相対性理論の提唱は「革命」と形容するにふさわしい出来事であった。二〇〇年以上、科学の規範とみなされてきたニュートン力学に修正を迫り、時間・空間の概念を根底から覆す理論が生まれたからである。そして、この理論によっても物理学の世界からついに追放されるはめになったものがある。【Ⅰ】

それは宇宙空間に充滿し、光（電磁波）を伝播させる媒質として想定されていたエーテルである。そのルーツは天動説にまで遡ることを考えると、古代ギリシャの自然観は最終的にアインシュタインによって引導を渡されたと表現できる。【Ⅱ】

このように、科学の進歩、発展は、ある時代まで常識としてまかり通っていた学説が新説に置き換えられるという転換の連続として捉えられることが多い。確かに科学のチヨウリゆうを大局的に眺めれば、そのように要約しても間違いはなからう。

### 【 III 】

しかし、だからといって、事はそれほど単純ではない。捨て去られたものにあらためて注目してみると、そこから現代科学につながる歴史の異なる相貌そらぼうが浮かんでくるからである。

地動説の登場により、地球は宇宙の中心に位置し、絶対静止をしているという地位を太陽に明け渡した。ところが、やがて太陽もまた、その特権的な地位を放棄させられることになる。宇宙には絶対静止の中心などないことが相対性理論の帰結として導き出されたからである。太陽は惑星の運動を記述するさいの ii な原点にすぎなかったのである。【 IV 】

錬金術は化学反応のソウオさでは不可能であることが証明されたが、二〇世紀に放射性元素の研究が進み、原子核の存在が突き止められると、元素の変換は起きることが明らかにされた。装いをあらたにして「錬金術」は、夢から現実へととなっている。

では、熱現象を説明するカロリックに付与された不可秤量物質なる概念はどうなったであろうか。これはまさに、光（電磁波）を粒子とみなした光子がそれに対応する。光子はエネルギーをもつ歴れきとした実体であるにもかかわらず、仮想されたカロリックと同様、質量は0である。また現代の素粒子論に従えば、誕生直後の宇宙ではすべての粒子は質量がなく、光速で飛びまわっていたと考えられている。そこは不可秤量物質が充滿する世界であった。ところが、ヒッグス場の発生によって光子以外の粒子は質量をもつようになったというわけである。【 V 】

自然発生説も一度は否定されながら、今日、あらたな展開をみせている。DNAの二重らせん構造がX線を用いた物理学の実

験によって解明されたことに象徴されるように、二〇世紀も後半に入ると、生命現象は物質科学の一分野に取り込まれるようになってきた。そして、太古の地球で複雑な有機高分子から成る物質がなんらかの化学、物理学反応によって原始生命が創つくられたと考えられている。そのメカニズムはまだ謎なぞに包まれているものの、v。

こうして、生命の自然発生説は物質科学とリンクしながら復活してきたわけである。

(小山慶太『へどんでん返し』の科学史』より)

問1 太線部ア～オのカタカナで表記された部分に使用する漢字を、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

ア

イきよ

①

5 4 3 2 1  
依 意 偉 居 委

エ

チヨウリゆう

④

5 4 3 2 1  
潮 張 調 朝 長

イ

こうチク

②

5 4 3 2 1  
畜 竹 築 逐 畜

オ

ソウさ

⑤

5 4 3 2 1  
燥 創 装 相 操

ウ

シヤふつ

③

5 4 3 2 1  
赦 斜 捨 遮 煮

問2 二重傍線部①・②はそれぞれ本文中でどのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

① 帰着される

②

- |      |        |       |     |      |
|------|--------|-------|-----|------|
| 5    | 4      | 3     | 2   | 1    |
| 使われる | 影響を与える | たどり着く | 反する | 変化する |

③ 歴とした

④

- |       |      |     |      |     |
|-------|------|-----|------|-----|
| 5     | 4    | 3   | 2    | 1   |
| 間違いない | 不確かな | 小さな | 不思議な | 有名な |

問3 空欄①・②に入れるのに最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

空欄①

⑤

- |     |      |     |      |     |
|-----|------|-----|------|-----|
| 5   | 4    | 3   | 2    | 1   |
| つまり | たとえば | さらに | ところが | だから |

空欄②

⑥

- |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 5   | 4   | 3   | 2   | 1   |
| 便宜的 | 社会的 | 客観的 | 主体的 | 絶対的 |

問4

波線部①「地動説という新しい宇宙観を基盤にして一七世紀後半、近代科学の最初の理論体系となるニュートン力学が確立されるわけである」とあるが、本文中で述べられたニュートン力学についての説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑩

- 1 アリストテレスの運動論を否定したニュートン力学はこれまで何度も修正されたが、その結果現在では誤りのない完全な理論となっていて、これから先何らかの誤りが発見され、修正されるようなことはないと考えられる。
- 2 一七世紀後半に確立されたニュートン力学は、現在まで修正が必要となるような誤りは発見されていないが、そのような理論であっても今後誤りが発見され、新説に取って代わられる可能性を否定することはできない。
- 3 ニュートン力学はそれまでの科学の常識を覆す画期的なものであり、その後の科学の規範となったが、そのような理論であっても完全ではなく、旧説から新説へという科学の歴史の流れの中で誤りを指摘され修正を余儀なくされた。
- 4 ニュートン力学はこれまでいくつもの誤りが発見されているが、それを修正できる理論がいまだに確立されていないため、一七世紀後半から現在まで、新説に取って代わられることなく、科学の規範としての地位を保ち続けている。
- 5 古代ギリシャの運動論を元にして確立されたニュートン力学は、一七世紀後半から二〇〇年余りの間、科学の規範とされてきたが、二〇世紀に入ると重大な誤りが発見され、現在では道具として使われることのない歴史的な遺物となっている。

問5 空欄⑩に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑩

- 1 すなわち、錬金術とは違って永久機関は科学の進歩によって実現不可能なことが証明されたのである
- 2 こうして、科学の進歩は錬金術、永久機関という一攫千金いっかくせんきんを当てこんだ人々の企てを打ち砕いたのである
- 3 ただし、熱力学は錬金術や永久機関を絶対に不可能なものとして全面的に否定したわけではないのである
- 4 そのため、熱力学が否定されるまでは、錬金術や永久機関が科学的な研究の場に再び現れなかったのである
- 5 しかし、人間の欲望は止まるとどことを知らず、錬金術や永久機関は後にそのままの形で見事復活するのである

問6

波線部⑤「一九世紀半ばには生物学の分野でも大きな変革が訪れた」とあるが、この変革に関する説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑫

- 1 ダーウィンやパスツールの新説は伝統的な学説を否定し、非科学的な自然観・生命観に大きな転換をもたらしたが、彼らが新説を導き出すために用いた方法は伝統的かつ非科学的なもので、多くの誤りを内包していた。
- 2 ダーウィンやパスツールの新説は思弁的な論理をつなぎ合わせることで、伝統的な自然観・生命観に大きな転換をもたらし、生物学における「コペルニクスの転回」と言えるほどの大きな出来事であった。
- 3 ダーウィンやパスツールの新説は観察記録や標本、実験などといった客観的な証拠をもとにしてそれまで正しいとされてきた定説に反証を試みたものであって、従来の自然観・生命観に大きな転換をもたらした。
- 4 ダーウィンやパスツールの新説は観察や実験の結果から導き出されたものであるが、彼らが用いた方法はそれまでの科学の歴史にはなかった新しいものであって、その後の科学の進歩、発展に大きく貢献することとなった。
- 5 ダーウィンやパスツールの新説は客観的な証拠から導き出された優れた理論であったが、当時の自然観に反するものであったため、彼らが正しい学説として社会に認められたのは二〇世紀に入ってからのことであった。

問7 波線部㉔「自然発生説も一度は否定されながら、今日、あらたな展開をみせている」とあるが、自然発生説における「あ

らたな展開」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

㉓

- 1 生命の発生に関する研究が、これまでのような生物学ではなく物質科学の一分野として行われるようになったということ。
- 2 自然発生説の自然の定義が変わり、それまで自然に含まれていなかったものが含まれるようになったということ。
- 3 X線のような高度な実験機器の発達によって、自然発生説を裏付ける客観的な証拠がいくつも発見されたということ。
- 4 かつてパストールが切断した生命と物質のリンクをつなぎ直すような研究が行われるようになったということ。
- 5 地球上のあらゆる生命は自然の中でのなんらかの化学、物理反応によって生まれたという考え方が有力になったという

うこと。

問8 空欄㉔に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

㉓

- 1 最初の生命体は親からではなく物質から生まれたことになる
- 2 地球上の生命は自然発生したわけではないということになる
- 3 いくつかの物質があればどんな生命でも創り出せることになる
- 4 生命の発生についてはパストールの考えが正しかったことになる
- 5 地球上に存在する生命体にはそれぞれ違った親がいたことになる

問9 本文には次の一文が抜けている。その入る位置として最も適当なものを、後の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑮

もちろん、これによって、天動説そのものが息を吹き返したわけではないが、空間の絶対性を否定する視点で見れば、地動説も所詮<sup>しよせん</sup>は宇宙に設定する任意の座標系のひとつにすぎなくなる。

5	4	3	2	1
┌	┌	┌	┌	┌
V	IV	III	II	I
└	└	└	└	└

本文の内容に最もよく合致するものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 科学というものは、旧説が新説に置き換えられながら進歩、発展していくというイメージを長い間持たれてきたが、二〇世紀に入ると、アインシュタインの相対性理論が古代ギリシャの自然観に引導を渡したように、旧説から新説への移行がさらに強まり、そうした科学のイメージはさらに強いものとなっていった。
- 2 科学というものは、天動説から地動説への移行のように、ある時代まで常識とされた学説が新説に置き換えられることによって進歩、発展していくと考えられてきたが、そのような科学の歴史はアインシュタインが提唱した相対性理論によって覆され、現在はさまざまな分野で過去に否定された旧説の見直しが進められている。
- 3 科学というものは、それまで常識とされてきた学説が新説に置き換えられることを繰り返しながら進歩、発展してきたと考えられることが多いが、旧説となった学説はそのまま消え去ってしまうものばかりでなく、錬金術や不可秤量物質などのように、その後の科学の進歩、発展によってあらたな展開をみせるものもある。
- 4 科学というものは、誤りを内包した旧説がそれを正した新説に置き換えられることによって進歩、発展していくと考えられてきたが、二〇世紀に入って、そうした新説にもさまざまな誤りがあることが判明すると、旧説の正しさが再認識され、それらを元にしてあらたな研究が行われるようになってきている。
- 5 科学というものは、旧説を新説に置きかえながら進歩、発展していくものだと考えられ、これまで多くの学説が捨て去られてきたが、二〇世紀に入り、錬金術や不可秤量物質、自然発生説などさまざまな旧説が復活を遂げると、科学は常に進歩、発展するというイメージは消え、科学の歴史は大きく書き換えられることとなった。

## Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えなさい。

科学にとって最も重要なことは、科学的に検証された法則が、それが成り立つ条件の下では、誰にとってもいつでも成り立つ、ということなのです。誰かがやるとそうなるのだが、別の誰かがやってもそうならないということでは、誰にとってもそうであるといわざるを得ない、という科学の結果としての条件を満たしていません。誰にとってもそうであるといわざるを得ない結果を得るためには第一に、用いられる概念やその定義が、誰にとっても①で再現可能であることが必要です。あるものを用いて、ある現象の説明をした、という結果を再現したいと思ったときに、<sup>Ⓐ</sup>それらの条件をもう一度作りだすことができなかつたら、それを追試することなどできないのです。

したがって、科学の実験に使われた物や実験方法については、後でそれを再現できるように詳細な情報が与えられていなければならぬと決まっています。例えば薬品なら、どこのメーカーのなんという薬品をどれだけ使ったと、きちんと書かなければならないのです。野外の生物を使った実験では、どこにいた何という学名のどのような生物を何匹、どの年のどの月に調べた、とかそれに使った生物の標本はどこの博物館には<sup>Ⓐ</sup>カンしてある、とか書かなければなりません。このようなことはすべて、実験の再現性を保証するためです。科学の法則はいつでも誰にでも再現可能でなければなりませんから、誰かがもう一度やろうと思つたときに条件を再現できる情報が必要なのです。【Ⅰ】

それだけではありません。<sup>Ⓑ</sup>説明される現象も再現可能でないと困ったことになります。科学の説明はHow & Whyです。

Howは現象の成立機構のことですから、それがわかれば、いつでもその現象が再現できます。それを調べるには、いくつも積み重なっている反応の順番に従って、一つずつどういう反応が起こっているのかを知らなければなりません。たとえば無機的にブドウ糖を分解してエネルギーを取り出す解糖系で、最初ブドウ糖がある物質になり、次に別の物質になる、という具合に反応が連鎖しています。まず、ブドウ糖が最初の物質になることを調べ、次に2番目の物質に変わるところを示していくことが必要で

す。【Ⅱ】

したがって、現象そのものの再現可能性は科学による説明にとって重要な意味を持つこととなります。

自然現象でも、ある条件を整えれば、そのプロセスを何度でも再現できるものはよいに科学で検証できますが、一度きりしか起こらなかったことを説明するのは難しい。現象を再現することすらかなわなので、そのプロセスが科学的に説明できるかどうかを段階的に検証するのが難しいからです。それは検証できないということの意味しているわけではありませんが、難しいということ。それは以下のような理由によります。

再現可能な現象ならば、途中までのプロセスをひとつひとつ明らかにして、最後までどういうメカニズムで反応の連鎖が成り立つのかを明らかにできます。

⑱、一回しか起こらなかったことというのは、そこにどういうプロセスがあり、どのような反応連鎖によってその現象が起こるのかを考えることすら難しいでしょう。つまり、検証されるべき仮説を考えていくことそのものが難しいのです。【Ⅲ】

また、いくつかのプロセスを経て成り立つ現象なのに、各段階を再現できない場合、<sup>a</sup>逐次的に機構を検証していくことができませんから、やはり検証は難しくなります。どうい現象であるかによって、科学による検証しやすさに差があるのです。

科学による説明は客観的ですが、これは、誰がやってもそういう条件さえ整えればいつも同じ結果になるということが保証されるということの意味します。【Ⅳ】

したがって、ある人にしかできないとか現れない現象と科学とはあいシヨウが悪いものです。

例えば、幽霊や超能力と呼ばれる超常現象があります。これらの現象とは、いつでも誰でも直面できるわけではなく（だからこそ「超」なのです）、ある特殊な人や特別な状況で起きることです。ですから、再現性が「低い」あるいは「ない」現象なのです。

このような現象が科学の対象でないとはいいません。自然界にだって、一回だけしか起こらなかったらどうけれど、その説明が可能な現象はあります。例えば地球は一回しか誕生していませんが、なぜ、どのように地球ができたかは科学的説明の対象です。

話を戻します。実際、心霊現象や超能力は何度も科学的な検証の対象になっていきます。今でもです。例えば、超能力者の「トウシ」と呼ばれる能力を科学的に検証しようという試みは過去何度も行われています。通常我々が用いる知覚（視覚、チヨウカ、触覚など）によつては知ることのできない場所におかれた情報を、超能力者が当てることができるかという実験が主体です。しかし残念ながら（本当に残念です）、当たる確率が偶然より有意に高かった、という結果が得られたことはありません。有意とはそれは偶然ではないといえるほどという意味です。ともあれ、これらの検証により、科学的に超能力があるといつてよいという結果は得られていないということです。余談ですが、このような実験は米海軍や東京大学といった、権威ある研究機関でも行われています。

これらの実験では、超能力の有無を判定する方法は客観的です。ですから、y とい  
うことが客観的に示されたということなのです。ああ、面倒くさい。超能力は科学で説明できない現象なのではなく、超能力でしか説明できない現象は観察されたことがないということです。それはつまり、超能力があると結論づけられたことはない、ということですね。ただし、今までなかったからこれからもないということではないので、これから観察される可能性もあります。しかし、だからといって、今までのデータからは、超能力は存在すると言えないことは明らかです。

（長谷川英祐『科学の罨』より）

問1 太線部ア～オのカタカナで表記された部分に使用する漢字を、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

㊦

トウシ

㉔

5	4	3	2	1
透	陶	倒	統	投

㊦

ほカン

㉓

5	4	3	2	1
管	冠	官	缶	貫

㊦

チヨウカク

㉕

5	4	3	2	1
庁	超	張	跳	聴

㊦

ようイ

㉖

5	4	3	2	1
囿	位	遺	易	以

㊦

あいシヨウ

㉗

5	4	3	2	1
章	性	省	生	称

問2 二重傍線部①・②はそれぞれ本文中でどのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

① 逐次的に

②

5	4	3	2	1
丁寧	短い時間で	繰り返す	順を追って	まとめて

② 主体

③

5	4	3	2	1
必要	ほとんど	中心	ふつう	有名

問3 空欄①・②に入れるのに最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

空欄①

④

5	4	3	2	1
曖昧	独特	斬新	簡単	共通

空欄②

⑤

5	4	3	2	1
あるいは	しかし	さらに	たとえば	だから

問4

波線部①「それらの条件をもう一度作りだすことができなかつたら、それを追試することなどできないのです」とあるが、「それらの条件」をもう一度作りだすために必要なことは何か。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

②6

- 1 実験を再現しようとする人であれば、誰でも簡単に手に入れることができるような薬品や生物が使われていること。
- 2 実験を再現しようとする人だけでなく世の中の全ての人々に対し、実験に関する詳細な情報が公開されていること。
- 3 実験を再現しようとする人は、与えられている情報を鵜呑みにするのではなく、その適否を自分で判断すること。
- 4 実験を再現しようとする人が、実験に使用する薬品や生物などを自由に選ぶことができるようになっていくこと。
- 5 実験を再現しようとする人に対して、不可欠な事物の情報が、明確かつ詳細に与えられていること。

問5 波線部⑤「説明される現象も再現可能でないと困ったことになります」とあるが、ある現象が再現可能でないと困ってし

まうのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1〜5のうちから一つ選びなさい。

27

- 1 現象を再現することができないと、その現象を一つずつ段階的に検証していくことができなくなってしまふから。
- 2 現象を再現することができないと、特殊な人や特別な状況でしか科学的な検証をすることができなくなってしまふから。
- 3 現象を再現することができないと、その現象を科学的に説明するために必要な検証をすることが難しくなってしまふから。
- 4 現象を再現することができないと、誰が検証をしても毎回同じような結果しか得ることができなくなってしまふから。
- 5 現象を再現することができないと、その現象がどのようなものを科学的に説明するための検証が全くできなくなつてしまふから。

問6 空欄⑩に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑩

- 1 けれども、そうした現象でも再現できるようにしたのが科学なのです
- 2 そのため、これまでの科学はそうした現象を対象外としてきたのです
- 3 しかし、だからといってその現象を再現できないわけではないわけではありません
- 4 なぜならば、その現象をいつでも再現することが難しくなるからです
- 5 だから、そうした現象を科学がいちいち相手にする必要はないのです

問7

波線部◎「実際、心霊現象や超能力は何度も科学的な検証の対象になっています」とあるが、心霊現象や超能力の科学的な検証についての説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

29

- 1 心霊現象や超能力はこれまで本格的に検証されたことはなかったため、それらの有無を確認することはできなかつたが、今後、権威ある研究機関が検証を行うようになれば、この問題について明確な結論を得ることが期待できる。
- 2 心霊現象や超能力は誰もが簡単に観察できるような現象ではないため、これまでその存在を確認することができなかったが、今後も同様の検証を何度も繰り返していけば、それらの存在が確認されるだろうと思われる。
- 3 心霊現象や超能力は一般的な現象とは違って再現性のない特別な現象であつて、そうした現象についていくら科学的な検証を繰り返しても結果が変わることはなく、今後もそれらの存在が確認されることはあり得ない。
- 4 心霊現象や超能力が存在すると言えるような結果はこれまでの検証では得られていないが、このことはそれらが絶対に存在しないということではなく、今後の検証の結果、それらの存在が確認される可能性がないとは言えない。
- 5 心霊現象や超能力というものはもともと科学的な現象ではないため、今後、それらが他の科学的現象と同じように観察され、科学的に検証することができたとしても、それらが存在すると認めることは難しい。

問8 空欄⑤に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

30

- 1 今までの実験では、超能力者が自分しかできないとっていた現象は、科学的な検証の下でも、簡単に観察できた
- 2 今までの実験では、超能力者が簡単にできるといった現象が、科学的な検証の下では、ほとんど観察できなかった
- 3 今までの実験ではすべて、超能力者ができるといっている現象が、科学的な検証の下では、観察できなかった
- 4 今までの実験では、超能力者ができた現象は、科学的な検証の下では、観察することはできても再現はできなかった
- 5 今までの実験ではどれも、超能力者が誰でもできるといっていた現象は、科学的な検証の下では、誰もできなかった

問9 本文には次の一文が抜けている。その入る位置として最も適当なものを、後の1～5のうちから一つ選びなさい。

31

このためには、途中の過程までをきちんと再現し、その先に何が起こるかを予測し、それと結果が一致するかどうかを確かめなければなりません。

- 1 〔 I 〕
- 2 〔 II 〕
- 3 〔 III 〕
- 4 〔 IV 〕
- 5 〔 V 〕

- 1 現代社会において、ある現象が正しいということを認めてもらうためには科学的な検証が必要であるが、心霊現象や超能力のような特殊な現象は、いつ誰にでも再現することができるようなものではないため、そのような現象を対象とした検証は、他の現象とは違って必ずしも客観的である必要はない。
- 2 この世の中で起こるさまざまな現象の有無を科学的に判定しようとするときには、その現象を検証することが必要であるが、そのときに行われる検証は、条件さえ整っていれば誰にとってもそうであるといわざるを得ないような結果を得ることができる客観的なものであることが重要である。
- 3 現象の有無というものは科学的な検証によって判定されなければならないと考えられているが、地球の誕生のようにこれまでに1回しか起こらず再現が絶対に不可能な現象でも科学的に「あった」と認められているように、科学的な検証ができない現象でも科学的に「ある」と判定されているものは少なくない。
- 4 ある現象がさまざまな科学的な検証を経ていったん正しいものだと思われられると、それは仮説ではなく絶対的に正しい法則となるため、その法則に反する仮説が提出されたり、その法則と矛盾する現象が観察されたりしても、それらは法則に反するものとして科学的な検証の対象外となってしまう。
- 5 世の中で起こる現象には、誰もが簡単に再現することができるものからプロセスが複雑で特殊な能力を持つ人しか再現することができないものまで検証のしやすさに大きな差があるため、科学的な検証によって現象の有無や当否が判定されたとしても、その判定が必ずしも客観的で正しいものだとは限らない。

2021年度 一般入試<前期>解答 2月1日実施分

国語	
解答番号	解答
①	5
②	3
③	1
④	5
⑤	1
⑥	3
⑦	5
⑧	2
⑨	5
⑩	3
⑪	2
⑫	3
⑬	4
⑭	1
⑮	4
⑯	3
⑰	5
⑱	2
⑲	4
⑳	5
㉑	1
㉒	2
㉓	3
㉔	1
㉕	4
㉖	5
㉗	3
㉘	4
㉙	4
㉚	3
㉛	2
㉜	2